

敬する先生が、私の代りに往つて呉れるなら其様な結構な事はないと云ふて、即ち同氏を御国へ紹介して彼の地に留めてある自分の家財雑具は悉皆同氏へ贈ることにした」(二〇五号)

上京後、三宅は二カ月余り藩兵(築地)の隊付医者を命じられ、明治三年三月大学出仕の運びとなった。

(金沢医科大学)

十七・八世紀の長崎における 中国人医師たちについて

山本 徳子

十七・八世紀の長崎における医学を言う場合、まず、掲げられるのは、いわゆる南蛮医学・オランダ医学であろう。たしかに、当時の日本医学にとって、それらの医学は注目すべきものであつたろう。では、それまでの中国医学は、どこへ行ったのであろうか。大庭脩教授によれば、「長崎情緒とはオランダ情緒と人は言うが、実は、長崎の異国情緒は中国情緒である。」といわれている。「医学」と「情緒」とは一緒に論じられるものではないが、この見解も一理あるものと思われる。その長崎に來航していた中国人医師たちの活躍についての研究は、従来、あまり取りあげられることがなかったように解せられる。しかし、近年、着目されつつある。すなわち、戸出一郎博士の『王寧宇五雲子伝』および潘吉星教授の『日中医学交流史の中の

周岐来』などの研究がある。

では、江戸期、十七・八世紀に長崎に来ていた中国人医師たちには、どのような者がいたのか。主なものを掲げると次の通りである。

陳明德、王寧宇、僧澄一、戴曼公、僧化林、盧艸碩、陸文斉、沈燮庵、吳戴南、陳振先、朱来章、朱子章、周岐来、趙涖陽、李仁山、(馬医劉経先。胡兆新、楊西斎、陸品三) などがある。

これらの医師たちが来日した理由の一つに幕府の招聘によるものがある。また、中国の医書の輸入を求めるなど、当時の中国医学に対しての幕府および、一般人においても、要請のあったことが知られている。

これらの来日の背景については、また、中国側の事情も考慮せねばならない。

中国の医学に端を発したとされる本邦の医学が、西洋の医学への移行期において、来日していた明・清の医師たちについて概要を試みることにする。

(横浜市立大学医学部医史学教室)

R・オウエンの歯の硬組織名称の 命名補遺

本 間 邦 則

歯の硬組織の構成について、イギリスの比較解剖学者 Richard Owen (1804-1892) は「歯の主要部を形成するところを bone of tooth または tooth bone (歯骨) と称しているが、そのかわりに dentine (象牙質) という用語を提案する。第二の組織として Caementum といわれ、J.R. Tenon (1724-1816, フランス) により Cortex osseus と、また R. Blake (1798 年頃、アイルランド) により Crusta petrosa と名づけられているのを cement (セメント質) と呼び、象牙質とセメント質との間に存在する第三の組織は Encrustum, Adamas あるいは Substantia vitrea などと称されているが、enamel とすべきである」と述べている。そして dentine の用語はオウエンによってつくられたもので、一八四〇(天保十一)年に歯の硬組織の名称は